

天の香具山登り立ち国見をすれば

——叙景歌の一つの道——

小 野 寛

I

天皇、香具山に登りて望^{くにみ}したまふ時の御製歌

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をす
れば 国原は 煙^{けぶり}立ち立つ 海原は 鷗^{かきめ}立ち立つ うまし国そ 蜻蛉^{あきづ}島
大和の国は（巻1・2）

この歌は題詞によれば舒明天皇の御製であり、「国見歌」である。「国見」の語は万葉集においては他に次の6例が見られる。

(1) やすみしし わご大君 神ながら 神さびせすと 吉野川 激つ河内
に 高殿を 高知りまして 登り立ち 国見乎為勢婆 たたなづく 青
垣山 山神の 奉^{まつ}る御調と 春べは 花かざし持ち 秋立てば 黄葉^{もみぢ}か
ざせり……（巻1・38, 吉野宮に幸しし時、柿本朝臣人麿の作る歌）

(2) 鶏^{とり}が鳴く 東^{あづま}の国に 高山は さはにあれども 朋神^{ふた}の 貴き山の
並み立ちの 見が欲し山と 神代より 人の言ひ継ぎ 国見為 筑羽^{つくは}の
山を……（巻3・382, 筑波岳に登りて丹比真人国人の作る歌）

(3) 雨間^{あま}あけて国見毛将為乎故郷の花橘は散りにけむかも（巻10・1971,
花を詠む）

(4) やすみしし わご大君 高照らす 日の皇子の 聞し食す 御饌^{みけ}つ国
神風の 伊勢の国は 国見者之毛 山見れば 高く貴し 川見れば さ
やけく清し……（巻13・3234, 雑歌の一）

(5) 懸けまくも あやに恐^{かしこ}し 藤原の 都しみみに 人はしも 満ちてあ
れども 君はしも 多く坐^いせど……（中略）……わが思ふ 皇子^{みこと}の命は
春されば 殖槻^{うゑ}が上の 遠つ人 松の下道^{したち}ゆ 登らして 国見所遊 九

月の 時雨の秋は……（巻13・3324、挽歌の一）

(6) 秋津島 大和の国を 天雲に 磐船浮べ 臈に舳に 真權繁貴き い
漕ぎつつ 国看之勢志氏 天降り坐し 掃ひ言向け……（巻19・4254、
大伴家持・興に依りてかねて作れる侍宴応詔の歌）

(1) は吉野の離宮をめぐる山と川を持統天皇の「国見」に寄せてうたったものである。持統天皇が吉野へ行幸されてはこの高殿から吉野の風景を眺めて心を休められたことは確かであろう。しかしこの歌を「国見歌」とは言い難い。(2) は天平宝字元年（757）に伊豆に流された丹比国人の筑波岳に登っての歌で、筑波岳が貴い山だ、見事な山だと神代から言い伝えられ、古くからそこに登って国見をした山だというのである。(3) は作者および作歌年月未詳である。歌は雨が上がった晴間をみて国見をしたいと言うのであって、国見をしての歌ではない。(1) (2) (3) いずれも「国見歌」とは言えない。(4) (5) (6) もまた、今「国見」をして歌っているのではない。結局、万葉集における「国見歌」は、舒明天皇のこの御製が最初であり最後なのだと言ってよいだろう。従って「国見歌」は記・紀の歌謡その他古い歌謡に求めねばならない。

「国見」のことは、前掲(6)の大伴家持の歌にある、天孫降臨の際天雲に磐船を浮べ大空を漕ぎつつ「国見」をしたというのが最も古い。これは諸書に指摘されている通り、日本書紀神武紀に「饒速日命、天磐船に乗りて、大虚を翔行きて、是の郷を睨りて降りたまふに至りて、故、因りて目けて、『虚空見つ日本の国』と曰ふ。」とあるのに依ったものであろう。しかし書紀の記述に「国見」の事実を求めるならば、前述の神武紀引用文に数行先んじて、神武31年4月1日の条に「皇興巡り幸す。因りて腋上の喉間丘に登りまして、国の状を廻らして曰はく、『あなにや、国を獲つること。内木綿のまさき国と雖も、蜻蛉の臂の如くにあるかな』と」とあるのが最も古いものであろう。腋上の地には今独立した丘陵があり、土地では本馬山と呼んでい

る。ホンマはホホマ（喉間）の転じたものかも知れない。ここから大和平野の一部を展望することができる。

さて高所に登り立って、あるいは眺望のきく所に立って、「国見」をしてうたった歌を、記・紀から拾ってみよう。その中で特に次の2首を取り上げたい。

ある時天皇（応神），近つ淡海の国に越え幸でましし時，宇治野の上に御立ちまして，葛野を望^{みき}けまして，歌ひたまひしく，

千葉の 葛野を見れば 百千足る 家庭も見ゆ 国の秀も見ゆ（記41，紀34）

ここに天皇（仁徳）…（中略）… 淡道島見むと白りたまひて幸行でましし時に，淡道島に坐しまして，遙^{はちばろ}に望けまして歌ひたまひしく，

おしてるや 難波の埼よ 出で立ちてわが国見れば 淡島 淤能碁呂島 檳榔^{あちまき}の 島も見ゆ 佐気都島見ゆ（記53）

この2首と舒明天皇の「国見歌」（万2）とを比較しやすいように整理すると次表のようになる。

〔第1表〕		記 41（紀 34）	記 53	万 2
	A			大和には群山あれど
		（宇治野の上に）	おしてるや難波の埼よ	とりよろふ天の香具山
		（御立ちまして）	出で立ちて	登り立ち
	B	千葉の葛野を見れば	わが国見れば	国見をすれば
	C	百千足る家庭も見ゆ	淡島 淤能碁呂島 檳榔の島も見ゆ	国原は煙立ち立つ
		国の秀も見ゆ	佐気都島見ゆ	海原は鷗立ち立つ
	D		.	うまし国そ 蛸蛤島大和の国は
		第15代応神天皇の 国見歌	第16代仁徳天皇の 国見歌	第34代舒明天皇の 国見歌

ここに一つの共通点が明らかである。それは3首ともBとCの境目で意味上ははっきりしたポーズ（休止）があることである。ABに作者の行動を描き、それを順接の接続助詞「ば」（確定条件を示す）によってCとつないでいるところが3首に共通する。そしてC部がBまでの部分を前提条件として作者の目に見えたものを叙述するところ、また3首に共通する。この共通性からこれを「国見歌」の一つの形式だと見ることができよう。即ち、舒明天皇の「国見歌」は、記紀の上記2首の「国見歌」と系列を同じくする「国見歌」の一典型だと言うことができる。

次に相違点を明らかにしてみよう。表によってまず記41と記53とを比べると、BC部は全く同じであるが、記41にはAに当たる部分がうたわれていない。B部は何を見るかを示し、C部はその結果何が見えたかを示している。A部は、どこで見るかを示す部分なのである。「国見」はその本来の性格から考えても、どこで見るかということが重要な要素であることは当然である。とすれば、記41がA部を持たないということは「国見歌」として不完全な形であると言わねばならない。表に括弧を付して記したのは古事記本文中の叙述から転記したものである。記41はこの前文と一緒に始めて「国見歌」として完成する。即ち、「国見歌」としてまだ独立し得ない形なの다고言っでは言い過ぎであろうか。これに対して記53はA部を完備し、「国見歌」として完成した形であると言えよう。

A部を「どこで見るか」を示すものであると言ったが、「おしてるや難波の埼よ、出で立ちて、わが国見れば」と続く句には、ただ「どこで」をいうだけでなく、作者の実際の動作が集約されている。記53では作者が歌の中に生きて行動しているのである。記41は作者の位置が歌い込まれていないだけでなく、作者不在なのである。

万2の「とりよろふ天の香具山、登り立ち、国見をすれば」と続く句は、記53と全く同じである。「国見歌」のこの系列の完成した形式をふまえていると言える。そして万2は更に「大和には群山あれど」の句をA部に加えてい

る。私はこの句を「登り立ち」にかかると考え、作者が天の香具山に登った事実を強調するものと見る。大和には群がる山々があるけれどもその中で特にとりよろふと解するのではなく、大和に群がる山々の中で特に選んだこの香具山に登るのだと解したい。そうすることによって万2のA部は、国見する作者の位置とそこに至る作者の実際の動作を描くだけでなく、その動作をなすに当っての作者の心理をも表現していると言うことができる。これが記41・記53に対する万2の相違点の第1である。

第2の相違点はC部である。記41・記53で国見をした目がとらえたものは、「百千足る家庭」であり「国の秀」であり、幾つかの島々であった。どれも動きのない固定した景物である。ところが万2では動きのあるものをとらえている。国原では立ち登る炊煙であり、海原では飛び立つカモメたちである。そしてこれは偶然に動きのあるものを取り上げたというのではない。作者は眼下にひろがる大和平野の眺望の中から動きのあるものを意識的に求め、選択して、そしてその動きをそのまま表現しようと努めている。即ち、「立つ煙見ゆ、立つ鷗見ゆ」ではなく、また「煙立つ見ゆ、鷗立つ見ゆ」でもなく、「煙立ち立つ、鷗立ち立つ」とうたっているのである。「立つ煙見ゆ」は1枚のスライドを見るが如きである。動きがない。「煙立つ見ゆ」で8ミリ映画になるだろう。しかし煙が1本ずっと立ち上って行ったら、そのフィルムはおしまいである。「鷗立つ見ゆ」の鷗も飛び立って行ってしまったらおしまいである。ところが「煙立ち立つ、鷗立ち立つ」は、エンドレス・フィルムとでも言えようか。煙が、鷗が次から次へと立つのである。そして画面はワイドである。

第3の相違点は、万2のみD部を持つことである。万2の作者舒明天皇は国見をして、「国原は煙立ち立つ、海原は鷗立ち立つ」景を目のあたりに見て、大きな感動を受けた。その感動は、記41・記53のように「…見ゆ」であっさりとうたい切ってしまえないほど大きかった。「うまし国そ、蜻蛉島大和の国は」という感動の表現は、その倒置によって一層力強い。この国見に

おける感動の表現は「国見歌」のまた一つの形式である「国ほめ歌」に通ずるものである。例えば、記のヤマトタケルノミコトの「国しのひ歌」（紀では景行天皇の御製とされている）

大和は 国のまほろば

たたなづく 青垣

山ごもれる 大和しうるはし（記30）

また雄略紀6年2月4日の条の「天皇泊瀬の小野に遊びたまふ。山野の体勢を^り観^{そなは}して、慨然^{はげ}みて感^{みおもひ}を興^{もうたよみ}して歌して曰はく」

隠^{こもりく}国の 泊瀬の山は

出で立ちの よろしき山

走^{わし}り出の よろしき山の

隠国の 泊瀬の山は

あやにうらぐはし あやにうらぐはし（紀77）

これらの「国ほめ歌」の結句「大和しうるはし」「泊瀬の山はあやにうらぐはし」と同じ発想でありながら、万2はその感動をもっとあざやかにそして力強く表現し得ている。

以上三つの相違点から次のように推論し得るであろう。舒明天皇の「国見歌」は、記紀の「国見歌」の素朴さ、単純さに比して、国見して囁目の景物をうつすのに作者の目は鋭く観察はこまやかで、ただ表面の形を見るだけでなく景物の本質をとらえ、それを生々とそして無駄なく表現しようとしている。これは単なる「国見歌」から脱して、自然観照の歌になろうとしている。

こまやかな、適確な、自然の景物の写生と、その景から受ける感動を素直に高らかにうたい上げているところに、私は叙景歌の曙を見る思いがする。

II

舒明天皇がこの名歌（と私は信じる）をなされた特性—客観的な自然観照の目—は、天皇の次の歌にも現われている。

岡本天皇の御製歌一首

夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かずい寝にけらしも(巻8・1511)

斎藤茂吉は「万葉秀歌」の中で「此御歌は万葉集中最高峰の一つとおもふので、その説明をしたい念願を持ってゐたが、実際に当ると好い説明文を作れないのは、この歌は渾一体の境地にあってこまごましい剖析をゆるさないからであらうか。」と言っている。私もここではこまごましい剖析はよそう。しかし、天皇が恐らく毎夜小倉山に鳴く鹿の声を聞き、いつしか夕方になるとその声を待たれるようになっておられたであろうということには触れておかねばならない。そのことは「今夜は鳴かず」の1句に明らかである。今夜に限って鳴き声が聞えないことに気付かれる天皇の、自然に向けられたこまやかな注意と優しい心は、先の「国見歌」に示された自然観照の姿勢と共通するものである。今夜は鳴かぬ鹿を案じ、妻を得て早々と寝てしまったのかと想像されるほど、天皇の鹿への関心は深かった。鳴く鹿をよんだ歌は後代多いけれども、これほど鹿への思いやりの深い歌は見られない。

舒明天皇はこの2首だけを万葉集に残された。わずか2首からその作者を語することは不可能に近いが、叙景歌の曙とも言える「国見歌」を歌われた天皇がこの「小倉の山に鳴く鹿」の歌の作者であるということは、一つの傾向を示していると思う。私は田辺幸雄氏の次の提言に賛意を表したい。

「両首を通じて言えることは、ともにほとばしる熱い血や張りつめた生活意欲やから生まれた歌でなく、そういう激情的なものとはうらはらな静止した状態から、整って静かに流れ出る品のよい作であることである。わずか2首ではあるけれども、この特色は作者の政治的立場と無関係ではないであろう。」^(注1)

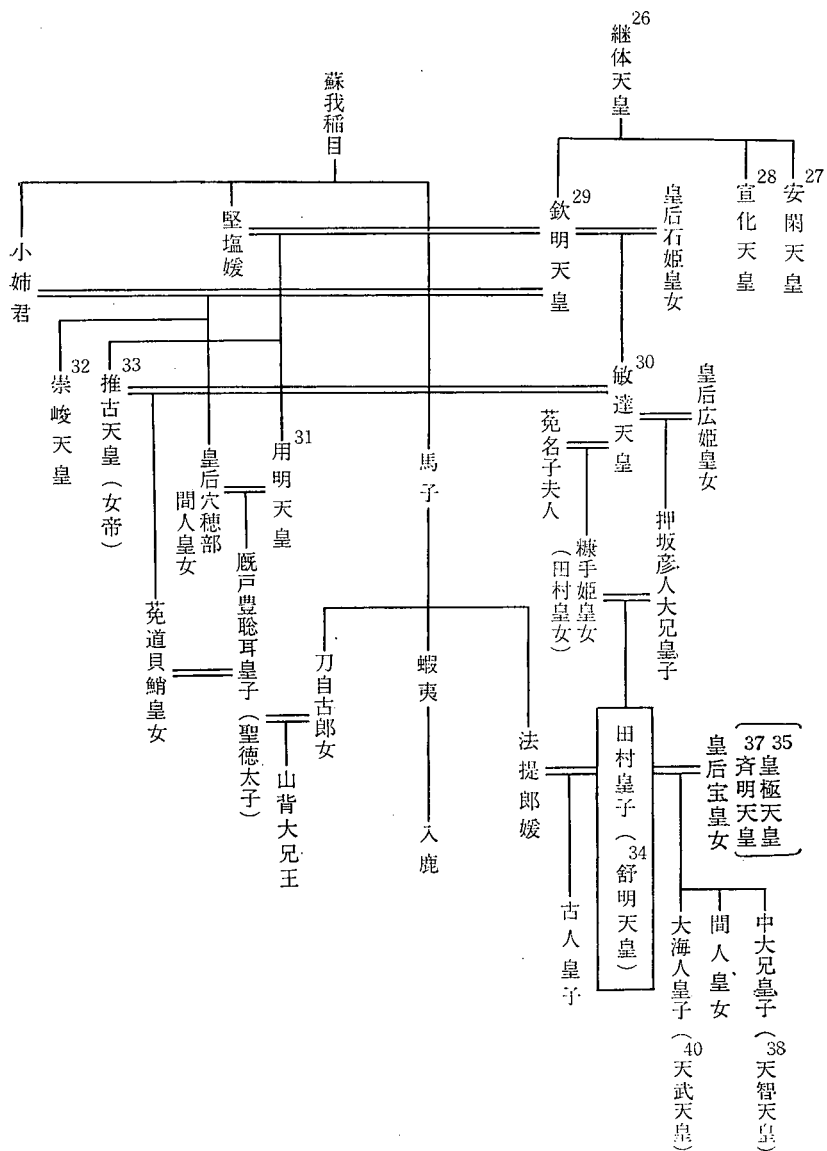
舒明天皇は推古天皇のあとを受けて即位されたのであるが、その即位に至るまでの事情は少なからず問題を含んでいる。恐らくその事情が、舒明天皇在位中の政治的立場を決定的なものにしたのである。

Ⅲ

舒明天皇（第34代）は、敏達天皇（第30代）と皇后^{おしきかのひこひとの}広姫との御子^{おほとのみこ}押坂彦人大兄皇子を父とし、^{あら}糠手姫皇女（彦人大兄皇子の異母妹）を母として生まれた。父彦人大兄皇子は用明紀に「太子彦人皇子」とあり、皇太子としてやがては天皇になるべき人であったが、即位に至らずしてなくなった。舒明天皇は敏達天皇の嫡孫である。即位の事情を語るのに便利のように舒明天皇周辺の主な人物のみ抜き書きした系図を示しておこう。

推古天皇29年に皇太子^{うまやとのとよとみのみこ}厩戸豊聰耳皇子（聖徳太子）が薨じて後、立太子のことを定めぬまま、推古天皇は36年3月崩御された。ここに皇位継承の問題が起こって来るわけである。この問題の演出者は大臣^{みんし}蘇我蝦夷であった。

蘇我蝦夷は馬子の子である。馬子は敏達天皇即位の時以来大臣として敏達・用明・崇峻・推古の4代に仕えた。馬子の父^{やましろ}稻目もまた大臣として宣化・欽明の2代に仕えた。系図に見られる通り、用明・推古両帝の生母^{きたしひめ}堅塩媛及び崇峻天皇の生母^{を あねのみこ}小姉君はこの蘇我稻目の娘であり、従って3帝にとって馬子は伯父に当るのである。この3帝の御代を含めて55年間大臣をつとめた馬子の勢力がいかに大きかったか想像がつく。この蘇我馬子の強大な勢力を、推古天皇崩御の2年前34年5月馬子薨去と共に、そっくり蝦夷が受け継いだのであった。舒明即位前紀に記すところによれば、蝦夷は皇嗣に田村皇子（後の舒明天皇）を立てたいと考えていたが、推古天皇は前皇太子聖徳太子の遺児^{やましろ おほとのみこ}山背大兄王を推されたようである。推古天皇は即位後すぐ皇太子に聖徳を立てられ、政務一切をまかされている。そして自らと敏達天皇との間に生まれた（推古天皇は敏達天皇の皇后であった）^{うまの かひだこのひめみこ}長女菟道貝^{うさみち}鮪皇女を東宮妃として太子にめあわせている。山背大兄王は系図に明らかな如く推古天皇の嫡孫ではないが、恐らく天皇が最も愛しておられた皇子であっただろうと思う。少くとも、彦人大兄皇子の死によって嫡流でなくなった田村皇子よりは、この山背大兄王を推される根拠はあると考える。



蘇我氏との縁戚関係から見れば、田村皇子は蘇我馬子の娘法提郎媛^{はてのいらつめ}を妻とした以外に蘇我氏との繋がりがないことが系図によって明らかである。山背大兄王は生母刀^と自古郎女^{このいちづめ}が馬子の娘であり、父聖徳太子の両親用明天皇と皇后の生母は共に稻目の娘であるから、蘇我氏の血が濃く流れている。それにもかかわらず蘇我蝦夷は山背大兄王を避けて田村皇子を立てようとした。

蝦夷はひとりで、皇嗣を田村皇子に決めてしまうつもりだったが、強行していたずらに廷臣たちの反対をひき出すことを不利と考え直し、衆議によって決すべく、推古天皇の遺詔を廷臣たちに示して相談する形をとった。この遺詔は田村皇子と山背大兄王とに別々に下されたもので、舒明即位前紀には先ず田村皇子が召されて「天下は大きな任なり。本より輒^{たやす}く言ふものに非ず。爾^{いまし}田村皇子、慎^{あきらか}みて察^{おた}にせよ。緩^まらむこと不可。」と、次いで山背大兄王には「汝^{いまし}、独りな誼^{とよ}譴^{まへつきみたち}きそ。必ず群臣^{ぐんしん}の言に従ひて、慎みて違ふな。」^(注2)と仰せられたとある。文面から判断すれば田村皇子有利は明らかであるが、蝦夷の予想に反して廷臣たちはすぐに答えなかった。二度三度と問いつめられてやっと、田村皇子に定まっているのではないかと返事をする者が出て、それに賛同する者の発言もあった。しかしそれでも「山背大兄王、是天皇とましますべし。」とはっきり主張する者が3人あった。決定を保留にした者も1人あった。廷臣たちは蝦夷の意図がわかっていただろうと考え、この場面から田村皇子擁立はその時の常識に反することであつたらしいと思わせる。

舒明即位前紀に記された山背大兄王の言によれば、かつて推古天皇から「汝が叔父の大臣の、常に汝が為に愁^{もろ}へて言さく、百歳の後には、嗣位^{ひつぎの}汝に当れるに非ずやとまうす。故に慎みて自愛^{つと}めよ。」との詔を受けたことがあり、天皇の病気が重くなった時には田村皇子も列席している中でひとりその枕辺に召されて「汝本より朕^{こころ}が心腹^{めい}たり。愛^{めぐ}み寵^{あが}むる情^{なさけ}、比^{たひ}すべからず。其れ國家の大基^{あかど}は、是朕が世のみに非ず。本より務めよ。汝肝稚^{かんぢ}しと雖も、

慎みて言へ。」との遺詔を受け、歓喜におどり上がったという。

この遺詔と蝦夷が示したふたりへの遺詔といずれが真実であるか。それは、山背大兄王によれば病に臥す天皇の側には数十人の人々が侍っていたようであるから、時の人々にはわかっていたであろう。それ故にこそ、蝦夷の権力をもってしても、衆議の席ですっきり決まらなかったのである。このことは、蝦夷の示した遺詔が田村皇子擁立のために改変されたものであり、山背大兄王の言が真実であったことを示唆するものである。

蝦夷の叔父境部臣摩理勢は衆議の日より前に蝦夷から皇嗣について意見を求められ、「山背大兄を挙げて天皇とせむ」と答え、蝦夷の再度の間には二度答える必要はないと怒り、ついには蝦夷と争うに至った。山背大兄王は亡父聖徳太子の遺言「諸悪莫作。諸善奉行。」を守って「私の情有りと雖も、忍びて怨むること無し。」と自ら身を引く決意を語り、摩理勢にも蝦夷に従うことを説いたが、摩理勢は最後まで蝦夷に抗し、蝦夷の派遣した軍勢に摩理勢もその子も殺されてしまった。

ここに田村皇子は、蝦夷及び廷臣たちに即位を勧められ、舒明天皇となったのである。

蝦夷がこれほどまでして山背大兄王を避け、蘇我氏と血縁関係の全くない田村皇子を立てたことは、いかに田村皇子が蝦夷にとつて御し易いと考えられていたかがわかうというものである。山背大兄王は聖徳太子の長子で、舒明即位前紀に見られるところでは、蝦夷に対しても言うべきことははっきり言い、さすがの蝦夷もたじたじであった。また前述の如く父太子の遺志を守る心が強く、人望も厚かっただろうと思われる。そして自ら天皇となって天下を治めたい意志をも持っていたようである。それに反して田村皇子は自らの意志なく、ただ蝦夷に推されて即位させられてしまったという感がある。

舒明天皇在位13年間、大臣蝦夷の力がいよいよ強大になったことを考えると、天皇は天皇として一体何ができたであろうか。舒明紀には天皇のまつりごとと言える記事は、高麗・百濟・新羅・大唐等からの使者を接待したこ

と、朝廷に背いた蝦夷を討たしめるため軍勢を派遣したこと、百濟宮と百濟大寺（後の大安寺）を造営せしめたことぐらいであろう。紀には他に、彗星・流星・日蝕・大水・大旱等天文気象に関する記事が10をかぞえるのが目立つ。

舒明紀を何度読み返しても、舒明天皇の天皇としての姿は浮んで来ない。天皇は、その即位の事情から推察して、政治への積極的な意志や行動を示すことなく13年間に過ぎたに違いないと思う。（このことを論証せんがために舒明即位前紀を長々と解説し、ここまで語って来たのである）とすれば、舒明天皇の「国見歌」は、天皇の国家統治への積極的な意欲をうたう歌ではなく、また自らが統治する国土を誇るという歌でもないだろう。

政治の第一線から遠慮させられている天皇が日々心を向け得たものは、美しい大和の自然であったに違いない。天皇の穏やかな優しい心が、その政治的立場ゆえになおさらに自然に向けられて、かすかに聞える鹿の鳴き声にも毎夕心を寄せ、その鳴き声の変化を聞きのがさなかった。天皇の独自の歌境がここにはぐくまれたと思う。こまやかな観察が客観的描写を生み、素直に物に感ずる心が自然に対する感動となった。これが叙景歌を生み出す重要なモーメントである。舒明天皇の「国見歌」が叙景歌的性格を持ったのは当然のことであった。

IV

万葉集における叙景歌を歴史的に見る時、普通次のように語られる。

「短歌の歴史の上からいうと叙景歌の先駆者として彼（高市黒人一筆者注）の占める位置は大きい。叙景歌人としての赤人の名は高いが、黒人はその先輩として既に一期前に純粋な叙景歌の名作をいくつか残して居るのである。」（五味智英「古代和歌」より）

高市黒人は周知の通り彼の18首全て旅における歌である。（もっともその

18首には作者に疑義のあるものもあるけれども、それらはこの小稿に関係のない歌なので、今はそのことには触れない。) その中の次の3首に注目してみたい。

- (1) 四極^{しはつ}山うち越え見れば 笠縫の島漕ぎかくる棚無し小舟 (巻3・272)
(2) 磯の崎漕ぎ廻み行けば 近江の海八十^{みゑ}の湊に鵠多^{なづきは}に鳴く (巻3・273)
(3) 住吉^{すみのえ}の得名津に立ちて見渡せば 武庫^{むこ}の泊ゆ出づる船人 (巻3・283)
- (1) は四極山の峠を越えると忽ち眼界が開けて、海上の景が目に入って来たのである。1隻の小さい舟が島陰にかくれようとするところを何の技巧も加えずに描いている。(2) は突き出た磯の先端を舟を漕いでまわって行くにつれて眼界が開けて、湖上のひろびろとした景が見えて来た。湖岸のあちこちに見える港、そこに飛びかう鵠が見え、その声まで聞えるのである。(3) は大阪湾を見渡せる住吉の得名津に立って海上遙か北の方を眺めやると、対岸の武庫の港あたりから出て来る舟が見えたのである。

沢瀉久孝博士は「万葉集注釈」で(2)について「縦と横との相違はあるが、作者の動きにつれて新しい眼界がひらける姿が描かれた点は前の作と同型である。」と、(1)と(2)とが同型であることを言っておられるが、(3)もまた眼界の開けた場所に出て海上遙かに眺めた景を描いており、3首とも全く同趣である。眼界の開けた場所に出て視界に入った景を描く——これは、舒明天皇の「国見歌」における、香具山に登り立って国見をし眼下にひろがる大和平野の景を描くのと同趣ではないか。

黒人のこの3首は、歌の形態においてもまた、舒明天皇の「国見歌」と類似している。黒人の3首は共に前半と後半とに2分され、前部には後部においてよまれた景が作者の視野に入るための条件が示されている。即ち前部は視界が開けるための作者の動きを叙述する部分である。そしてそれを前提条件として始めて後部の叙景が成り立つ。前部は前提条件部であり、後部は叙景部である。これを表にして示せば次のようになる。

〔第2表〕

	(1)	(2)	(3)	舒明天皇「国見歌」	第1表
前提条件部	四極山	磯の崎	住吉の得名津に	大和には群山あれど とりよろふ天の香具山	A
	うち越え見れば	漕ぎ廻み行けば	立ちて見渡せば	登り立ち 国見を すれば	B
叙景部	笠縫の島	近江の海	武庫の泊ゆ	国原は煙立ち立つ	C
	漕ぎかくる棚無し小舟	八十の湊に鵠多に鳴く	出づる船人	海原は鴈立ち立つ	
				うまし国そ 蜻蛉島大和の国は	D

黒人のこの3首を叙景歌だとすれば、その3首と全く同趣同型である舒明天皇の「国見歌」は、やはり万葉集の叙景歌の曙だったと言うことになるだろう。言い換えれば、黒人の叙景歌としてのこの形態は、舒明天皇の「国見歌」から引き継がれたもので、この形態が初期の叙景歌の典型であると、私は考えるのである。^(注4)

この形態は、考えてみれば、自然の景を述べるのに最も素朴な、それこそ最も自然な形態である。即ち「○○で見たら××が見えた」という形なのだから。我々の日常生活の中でも「屋上に上ったら、富士山がきれいに見えたよ。」とか「私の部屋の窓から見ると、東京タワーがまっ正面です。」というような言い方がよくある。これが歌になったものと考えればよい。

この形態が素朴なものであればあるほど、黒人以前にもこの形態の歌が作られるはずだと思われる。舒明天皇時代以後黒人に至るまで、即ち万葉第1・2期に属する歌を見てみよう。

第1期には額田王の次の歌がある。

君待つとわが恋ひをれば わが屋戸のすだれ動かし秋の風吹く（巻4・488）

しかしこの前提条件部「わが恋ひをれば」は作者の行動を述べているとは言いがたく、君を待って恋しく思っている心情が前提条件となっている。また接

続の助詞「ば」についても、「国見歌」および黒人の3首では前提条件部に示されたことをするとその結果として見えたり起こったりするものが後部に描かれるというような関係を表わしているが、この歌では恋しく思っていると丁度その時に見えたり起こったりするのであって、意味は異なる。また後部の叙景らしき部分についても、客観的な写生と見る解釈もあるけれども、人の訪問してくる前兆を示す諺によると解するもあり、これを叙景歌と呼ぶことは無理であろう。第1期にはやはり叙景歌そのものがまだなく、国見歌以外ではこの形態を生かすことができなかったのである。

第2期に属する歌としては、まず柿本人麿の次の3首がある。

東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば 月傾きぬ（巻1・48）

稲田野も行き過ぎかてに思へれば 心恋しき可古の島見ゆ ^{こは} ^{一に云ふ} 潮見ゆ（巻3・253）

天離る夷の長道ゆ恋ひ来れば 明石の門より大和島見ゆ（巻3・255）

48の上3句「東の野にかぎろひの立つ見えて」は、「かへり見」するより時間的に先行する事実を述べている。「かへり見すれば」は作者の視線の方向を180度転ずることであって、そこに新しい視界が現われる。例えば山越えて峠に立って視界が急にひろがったのと同趣である。「月傾きぬ」はいかにも短い叙景部だが、253・255よりは「叙景」である。この歌は下2句「かへり見すれば月傾きぬ」が小さいながら人麿によるこの形態の叙景歌の唯一の例になっていると言えようか。

253の前提条件部「思へれば」は額田王488と同じく、行動ではなく心の状態を表わす語（思ふ）であるが、ここは「行き過ぎかてに」思いつつ実際は行き過ぎて行くのだから、作者の行動を暗示していると考えていいと思う。255の「恋ひ来れば」は額田王488の「恋ひを来れば」に比べて「来る」という行動を示す語が加わっており、488よりは作者の行動がはっきり表現されている。しかしそれでも、黒人の3首が作者の行動だけを客観的に描写してい

るのに比べると、これらは心情表現の方にウェイトがかかっているように感じられる。次に叙景部は「可古の島見ゆ」「倭島見ゆ」と見える対象物を示しているだけである。先掲の記53の国見歌の「淡島、淤能基呂島、檳榔の島も見ゆ。佐気都島見ゆ」と変るところがない。客観的描写ではあるが「叙景歌」とは言えないと思う。

次に

み立たしの島の荒磯を今見れば 生ひざりし草生ひにけるかも（巻2・181）

この歌は、持統天皇の御子で日並皇子^{ひなみのみこ}と呼ばれていた草壁皇子が即位に至らずしてなくなった時、皇子の宮に仕える舎人たちが悲しみ慕って作った24首の中の1首である。庭園の泉水の荒磯に雑草が生えているのに目をとめて、そこに焦点を絞ってうたった点、自ら叙景の歌になっている。しかし「生ひざりし草生ひにけるかも」は草が生えていることを言うのが本意でなく、そのように手入れもできないほどの悲しみに皆がうちひしがれていることを表現するのが本意であった。従ってこれは形態は類似しているが、本質的には叙景歌とは認め難い。これはやはり「挽歌」である。

もう1首

天の原ふりさけ見れば 白真弓張りて懸けたり夜路は吉けむ（巻3・289）

^{はしひと}間人宿禰大浦の三日月の歌である。作者間人大浦については全くわかっていないが、巻3の歌の配列から見て、この歌が第2期に属することは間違いないようである。この歌は叙景歌であろうと思う。美しい三日月が空にかかっている、夜道は明るいだろう——国原は煙立ち立つ、海原は鷗立ち立つ、うまし国ぞ、蜻蛉島大和の国は。両者相通ずる趣を持っている。叙景歌であるとは言っても、黒人と同時期のものであるだけに、黒人ほど描写を客観化することがまだできないように思う。また「天の原ふりさけ見れば」の句は、すでに第1期の歌、天智天皇の皇后倭姫の歌に「天の原ふりさけ見

れば大君の御^{みいの}寿は長く天^{あま}足らしたり（巻2・147）」とある。前提条件部が作者独自のものでないということは、この形態では致命傷と言えるかも知れない。

以上6首、自然を対象として客観的に表現する歌を厳選した。これによって、舒明天皇の「国見歌」は、国見歌という素朴な形式をとりながらその素朴さを利して見事に叙景歌になり得ていること、そしてその形態はその後自然描写の歌としては、黒人の3首も含めて9首見られるが、純粹の叙景歌としてこの形態を生かしたのは高市黒人であったことを知るのである。

V

この形態を叙景歌人山部赤人はどう受けとめているだろうか。類似のものは次の1首がある。

田児の浦^{うら}うち出でて見れば 真白にそ不尽の高嶺に雪は降りける（巻3・318）

前提条件部「田児の浦うち出でて見れば」は、舒明天皇および黒人のそれが眼界の急に（急にでない場合もあるが）ひろがるための行動がよまれていたのと同じく、田児の浦を通して山陰のような所から広い眺望のきく所へ出てそこから見たのである。後部は叙景である。この歌は舒明天皇→黒人の形態をそのまま受け継いだものと言えよう。しかし赤人はこの形態では1首しか叙景歌をよまなかった。赤人の叙景歌はそこに留まっていなかったようである。

ぬばたまの夜の更けゆけば 久木生ふる清き川原に千鳥しば鳴く（巻6・925）

赤人の吉野従駕の時の作である。前提条件部を持つ点、同じ形態である。しかしこの歌の条件は、今迄述べて来た作者の行動を前提条件とするのではなく、時刻に関するものである。その時刻になって始めて後部に描かれた景が存在するというわけである。景を見る時刻が制限されたけれども、作者がこ

の景を描いた時の位置が示されていないので、「国見歌」および黒人の3首が作者の位置を限定しているために我々読者はその作者と同じ位置からしかその景を眺めることができないのに対して、我々はどこに立って鑑賞してもよい。これは客観性が豊かになったと言えようか。また時刻を限ることは、絵画で言えば全体の色調を明るくするか暗めにするか、あるいは背景の空にどういう色を用いるかを決することであって、叙景の一部を成している。従って赤人のこの歌は1首全体叙景に終始していると言っていいだろう。次の歌も同じである。

若の浦に潮満ち来れば 渦を無み葦辺をさして鶴鳴き渡る（巻6・919）

この叙景歌の形態は赤人によって開発されたと言えるかも知れない。舒明天皇の「国見歌」にその蓄を見、黒人の3首にその開花を見た叙景歌がここに結実したものと見たい。

黒人の3首の「開花」に伴って咲いたのは、間人大浦の289「天の原ふりさけ見れば」や赤人の318「田児の浦ゆうち出でて見れば」だけではなかった。

(1) 島伝ひ^{みぬめ}敏馬の崎を漕ぎ廻れば 大和恋しく鶴さはに鳴く（巻3・389
作者未詳）

(2) しなが鳥猪名野を来れば 有間山夕霧立ちぬ^{やどり}宿は無くて（巻7・1140
作者未詳）

一本に曰く

しなが鳥猪名の浦廻を漕ぎ来れば 夕霧立ちぬ宿は無くて

(3) 難波渦潮干に立ちて見渡せば 淡路の島に鶴渡る見ゆ（巻7・1160）

(4) 紀の国の雑^{きいか}賀の浦に出で見れば 海人の燈火波の間ゆ見ゆ（巻7・1194）

(5) 磯に立ち沖辺を見れば 海藻^め刈舟^{かり}海人漕ぎ出らし鴨翔ける見ゆ（巻7・1227）

(6) 見渡せば 春日の野辺に霞立ち咲きにほへるは桜花かも（巻10・1872）

作者未詳)

〔7〕大坂をわが越え来れば 二上に黄葉流る時雨降りつつ(巻10・2185)

〔8〕妹がりと馬に鞍置きて生駒山うち越え来れば 黄葉散りつつ(巻10・2201)

〔9〕夜を寒み朝戸を開き出で見れば 庭もはだらにみ雪降りたり(巻10・2318)

〔10〕わが背子を吾が松原よ見渡せば 海人少女ども玉藻刈る見ゆ(巻17・3890 三野連石守, 天平2年作)

この(1)は巻3の雑歌の部の最後の歌で、若宮年魚麿が伝誦したものと左注に記されているが、作者も作歌年代もわからない。この歌と黒人の273との類似は明らかだが、どちらが先なのであろうか。

黒人 273 磯の崎漕ぎ廻み行けば 鶴さはに鳴く

(1) 398 敏馬の崎を漕ぎ廻れば 鶴さはに鳴く

また(3)の「難波渦潮干に立ちて見渡せば」は、黒人の283「住吉の得名津に立ちて見渡せば」との類似が考えられる。(3)は巻7であるが、巻7は殆ど全部が作者不明で作歌年代も不明で、第2期から第3期へかけての歌とのみ推定されている。^(注6) 確実なことはわからないが(2)(3)(4)(5)の巻7の歌はやはり黒人の影響下に生まれたものではなかろうかと思う。巻10の(6)(7)(8)(9)もまた巻7と同様に考えるほかはない。

歌を形態からばかり論ずることは、下手をすると服装で人を判断すると同じ誤りを犯しかねない。しかしそれを全てだと考えるのでなければ、それも一つの見方として認められるであろう。この小稿はそういう考えで思い切って発表させていただいた。

またこの形態が第4期に至って大伴家持によって再生されることは、別の機会にまとめたいと思う。(本学講師)

(注1) 田辺幸雄「初期万葉の世界」所収「初期万葉の作家たち」の舒明天皇の項に述べられている。

(注2) 書紀推古36年3月6日の条には「田村皇子を召して謂^{かた}りて曰^{のたま}はく、『天位^{たかみくら}に昇^ありて鴻基^{あまつひつぎ}を経^をめ綸^{ととの}へ、万機^{よろづのまつりごと}を馭^しりて黎元^{よはみたら}を亭有^{やしな}ふことは、本より輒^かく言^かふものに非^{あら}ず。恒に重^{おも}みする所なり。故、汝^{みづか}慎^{しん}みて察^{さつ}にせよ。軽^{かる}しく言^かふべからず』とのたまふ。即日^{そのひ}に、山背大兄^{やまのへ}を召^よして教^しへて曰^{のたま}はく、『汝^{みづか}は肝^{かん}稚^ちし。若^もし心^{こころ}に望^{のぞ}むと雖^なも、諠^{とよ}き言^かふこと勿^な。必^{かならず}ず群^{まへつきみたち}の言^{こと}を待^{まち}て従^{したが}ふべし』とのたまふ。」とある。これは周知^{しうち}のことであるが、学生諸君のためにもと思って書き添えた。

(注3) 蝦夷^{えみ}について書紀景行27年2月12日の条に「東^{ひな}の夷^なの中に、日高見^{ひたかみ}国^{くに}有り。其^{その}の国^{くに}の人^{ひと}、男女^{おとこ}並びに椎^{かみ}結^{むす}け身^みを文^ふけて、為^なる人^{ひと}勇^{ゆう}み悍^{かん}し。是^{これ}を総^{すべ}て蝦夷^{えみ}と曰^いふ。」とあり、同40年の条にも詳しい。蝦夷^{えみ}はエミシといい、アイヌ人の祖先^{せんぞ}だとする説^{せつ}が古^{ふる}くからあるが、未^{いま}だ決^{けつ}定的^{ていてい}な証^{しやう}拠^こがない。

(注4・5) 「万葉集大成7」に柴生田稔^{しげなり}氏の「万葉集^{まんやふしふ}の叙景^{じよけい}詩^し的^{てき}要素^{ようそ}」と題^{だい}する論文^{ろんぶん}があり、その中^{なか}で舒明天皇^{しゆめんてんわう}の「国見歌^{くにみうた}」の表現^{ひょうげん}について述べ「これは、ある景^{けい}に対^{たい}した場合^{ばい}の心^{こころ}の動き^{うご}きのあらはし方^{かた}として、ごく自然^{しぜん}で順直^{じゆんちき}なものであつて、叙景^{じよけい}的^{てき}表現^{ひょうげん}の成立^{ていりやう}つ場合^{ばい}の一つ^{ひとつ}の基本的^{きほんてき}な形^{かたち}であるやうに思^{おも}はれる。」とある。これが拙稿^{しやくかう}へのヒントとなつた。

(注6) 日本古典文学大系・万葉集2の解説^{かいせつ}に「作者^{そしや}及び作歌事情^{さか}に関する…(中略)…乏^{ひく}しい資料^{しりょう}と、歌^{うた}のなかに出^でて来^きる地名^{ちやうめい}とを勘案^{かんあん}すると、この巻^{まき}の歌^{うた}は大体^{たいたい}第2期^{だいふたふ}から第3期^{だいさんふ}にかけてのものかと思^{おも}われるが、もとより確実^{かくじつ}なことはわからない。」とある。